

青少年の活力に関する研究調査について

総務庁青少年対策本部
調査係専門職員 柿本義行

I はじめに

総務庁青少年対策本部では、このほど「青少年の活力に関する研究調査」についてその結果をまとめ発表した。

最近の青少年は覇気がない、活力にとほしい、としばしば指摘されている。「いまどきの若者は……」というのは大昔から繰り返されてきた大人たちの繰りごとにすぎないだろうが、現在の社会を作りあげてきた大人たちからみれば、今の青少年がどこか頼りないと思われることもまた事実であろう。しかしながら、趣味や遊びに注ぎ込む彼らのエネルギーをみると、大人の期待する活力とは違った方向に彼らの活力が発揮されているようにも思われる。

このようなことから、彼ら青少年のもつ活力の方向、質、それにかかわるさまざまな要因について調査し、分析を試みたのが本調査である。もとより、このような質問紙調査によって青少年のもつ活力の絶対量を測ることは困難である。本調査では、それよりもむしろ青少年の活力の向いている方向やその程度、それにかかわる条件などを主としてとらえようとした。

II 調査実施の概要

本調査は、昭和59年9月17日から30日までの間に、15歳から24歳までの青少年8,000

人及び25歳から65歳までの成人3,000人を対象として実施した。標本の抽出は層化無作為抽出法により、調査員による個別面接調査を行った。回収結果は、青少年5,852（回収率73.2%）、成人2,410（80.3%）であった。

III 調査結果の概要

1. 日常生活の充実感

① いま、自分でおもしろいと思っやっていることがあるかどうか尋ねたところ、「ある」とする者は50.8%でほぼ半数であった。その内容としては、「スポーツ」「趣味・けいこごと」が多かった。

② 自分の今の生活が充実していると思っやっている者は、青少年、成人とも7割を超えており、青少年では友人関係、余暇や遊びについて充実感が高く、仕事や勉強、家庭や家族では成人の方が高くなっている。（図1）

③ また、青少年に若いうちにやっておきたいこと、成人には若いうちにやっておくべきだと考えることを尋ねた。青少年は「友人を得る」「人間関係を豊かにする」「技術や資格を身につける」をやっておきたいこととして挙げる者が多く、成人はこれらのほかに「体力を作る」「苦勞して自分をみがく」などをやっておくべきこととして挙げる者が多かった。（図2）

図1. 生活の充実感（＜充実している＞者の割合）

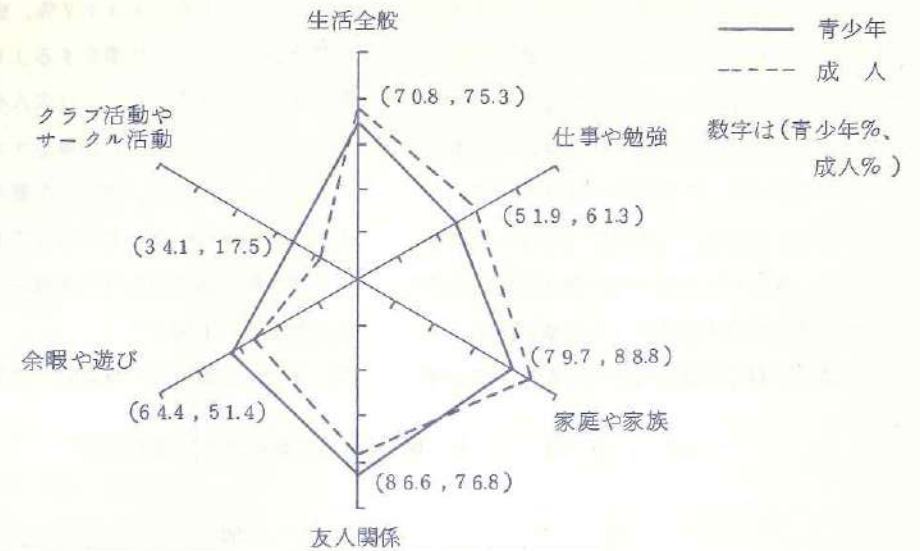
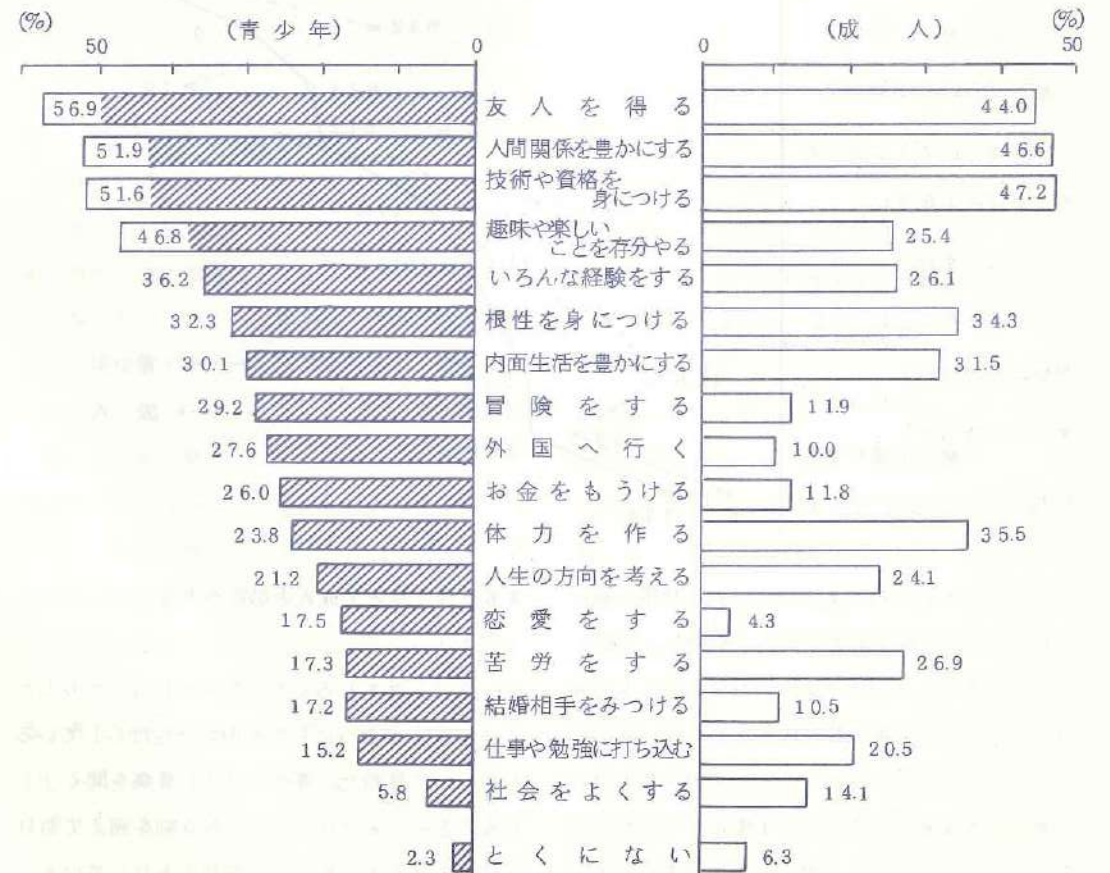


図2. 若いうちにやっておきたいこと



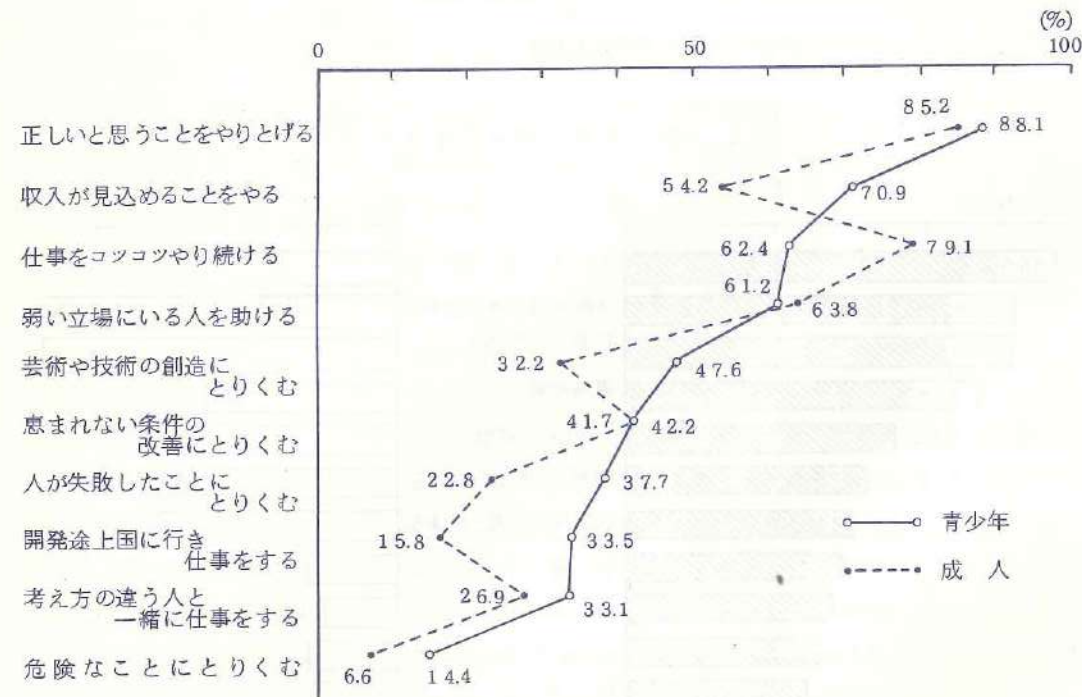
2. 意欲や自信

① ここでは、活力の発揮が求められるさまざまな状態を想定し、それらに対する意欲の有無をみることにした。「正しいと思うことをやりとげる」(青少年70.9%、成人54.2%)、「仕事をコツコツやり続ける」(青少年62.4%、成人79.1%)、「弱い立場にいる人を助ける」(青少年61.2%、成人63.8%)などが上位を占めており、概ね青少年の方が成人より意欲が高い。とくに、「芸術や科学の創造にとりくむ」(青少年

47.6%、成人32.2%)、「人が失敗したことにとりくむ」(青少年37.7%、成人22.8%)、「開発途上国に行き仕事をする」(青少年33.5%、成人15.8%)などでは成人を大きく上回っている。しかし一方、「仕事をコツコツやり続ける」といった忍耐力、持続力を要するものでは、成人の方がかなり高い率となっており、このあたりが青少年の活力のなさを指摘される一因とも考えられよう。(図3)

② また、日頃気分の減退した状態になることが

図3. 意欲の発揮 (<やる気がでる>者の割合)

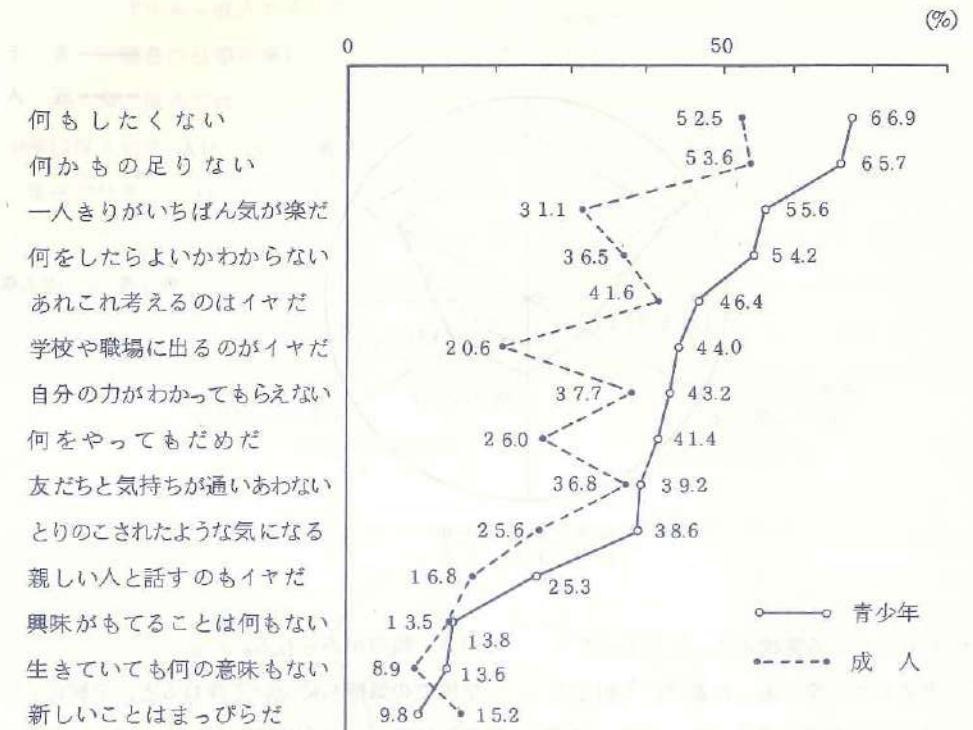


あるかどうかについても、いくつかの状況を設けて質問した。「何もしたくない」「何かものたりない」と思うことがある者がほぼ3分の2を占め、ほとんどの項目で青少年が成人よりも高い率となっている。とくに「一人きりがいちばん気が楽だ」(青少年55.6%、成人31.1%)、「何をしたらよいかわからない」(青少年54.2%、成人

36.5%)などで成人との差が大きくなっている。(図4)

③ 次に、おもしろくない気持ちになったりしたときに、どのようにしてその気分をはらしているかについて尋ねた。青少年では「音楽を聞く」「友人とおしゃべりをする」が5割を超えており、この2つは成人と比べて顕著な差となっている。

図4. 気分の減退 (<ある>者の割合)



また、「ねてしまう」「スポーツで汗を流す」「自分の部屋に閉じこもる」なども成人よりもかなり高い率となっている。

④ 自信のある領域として12の項目を用意し複数回答を求めたところ、青少年・成人とも「健康や体力には恵まれている」が最も多く、青少年で58.8%、成人で54.9%であった。青少年の方が成人より高い割合となったものは「その気になれば何でも人並みにできる」「交友関係は広いほう」「学校の成績は良い方だった」であり、「苦しいことでも耐える力はある」では成人の方が高い率であった。

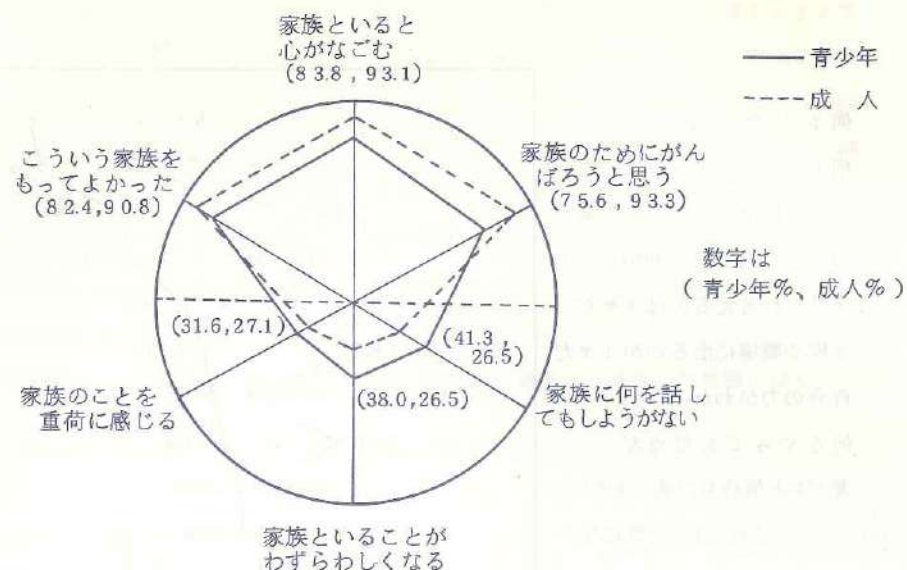
3. 各生活領域の現状と意欲

① ふだん家庭において家族との関係をどのようになっているかを尋ねた。家族に対する感情は全般的に良好であるが、成人と比べると青少年には

否定的な感情がやや強い傾向がある。すなわち、肯定的な項目「家族といると心がなごむ」「こういう家族をもってよかった」「家族のためにがんばろうと思う」では青少年より成人の方が高率となり、否定的な項目「家族のことを重荷に感じる」「家族といることがわずらわしくなる」「家族に何を話してもしょうがない」では逆に青少年の方が高い割合となっている。(図5)

また、家庭や家族の果たす役割として何を最も強く望んでいるかについては、青少年では「いざというとき力になってくれる」(30.2%)が最も多く、以下「くつろぎや安らぎを与えてくれる」(20.0%)、「生活上大切なことを教えてくれる」(16.3%)となっている。成人では「生きていくための心のよりどころとなる」が最も多く(25.0%)、青少年でも既婚者は、ほぼ成人と同様の傾向を示している。

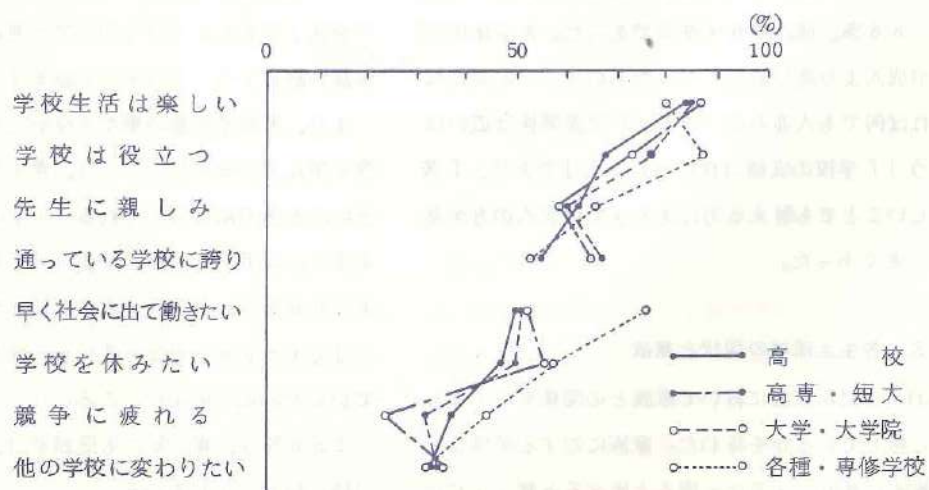
図5. 家庭での気持 (〈ある〉者の割合)



② 自分の在学している学校あるいは卒業した学校が自分の希望した学校であった者は約8割を占めており、またその学校に満足している者もほぼ8割となっている。学校で熱心に行っていることは、「友人や先輩とのつきあい」「クラブやサークル」が多い。青少年の在学者では学業に関するものが多く、卒業者では学業外の活動に関するものが多い傾向がみられる。

学校での気持ちについて尋ねると、全般に「学校生活は楽しい」「学校は能力をのばすのに役立っている」などの肯定的なものが多い一方、「学校を休みたい」「競争に疲れる」などの否定的な項目もかなり高い割合を示している。(図6)

図6. 学校での気持〔青少年在学者の学校種別〕 (〈ある〉者の割合)



尋ねた。希望の仕事につけたと答えた者が3分の2を占め、青少年・成人でその差はみられなかった。また、現在の仕事に満足している者は青少年で72.7%、成人では82.3%となっており、青少年は成人に比してやや低くなっている。

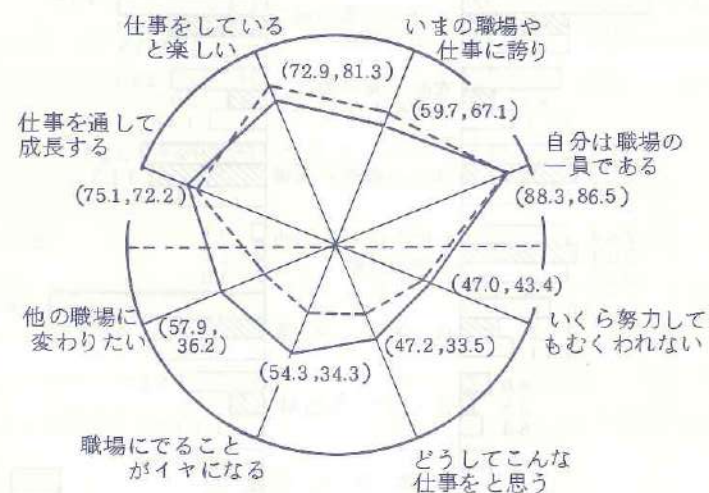
現在の仕事や職場の種々の側面について、どのような評価をしているかをみると、「職場の人間関係」では青少年・成人とも高く差はみられないが、総じて青少年の方が評価が低い。とくに「職場で自分の能力が生かされている」「自分の考え

が取り上げられる」などでは、成人との間にかなりの差がみられる。また、男女別では、男性が収入に対する評価が低いのにに対し、女性では自分の考えの採用に対する評価が低くなっている。

職場での気持ちについて尋ねると、肯定的な項目では青少年・成人の間にほとんど差はみられないが、「他の職場に変わりたい」「職場にできることがイヤになる」など否定的な項目では青少年の方が高い率となっている。(図7)

どのような仕事ならば、よろこんでいきいき仕

図7. 職場での気持ち〔有職者〕 (〈ある〉者の割合)



事ができるのだろうか。青少年・成人とも「建築家、技術者、プログラマー」「機械工、電気工、自動車工」が上位1、2位を占め、女性では「保育士、教師、学者」「医者、薬剤師、看護婦」「美容師、理容師、スタイリスト」が高い。青少年の特徴として、資格や技能が生かせる職種や華やかで自由な印象を与える職種をあげる傾向がみられ、とくに男性で顕著である。また、これらの職業を選んだ理由としては、「自分の特技や能力を生かせる」「自分の生き方にあっている」など自分の個性や生き方との合致をあらわす項目をあげる者

が多く、その職業につける可能性については、自分の努力いかんでつけると思う者が8割に達する。学歴と職業の関係では、職業選択時における学歴の有用性は認めているものの、社会に出れば実力がものをいうと考える者が圧倒的に多い。

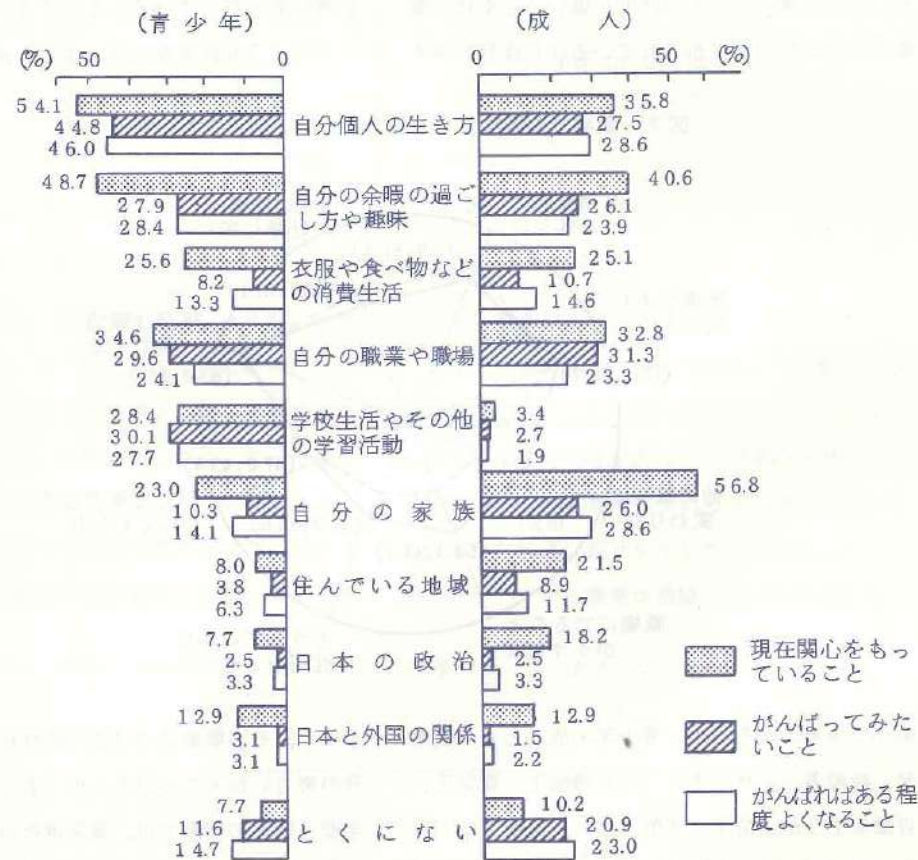
4. 社会的関心

① 個人の生活に関することから社会的な領域まで、さまざまなレベルの事柄について「現在関心をもっていること」「がんばってみたいこと」「がんばればある程度よくなること」の3段階で

みてみた。青少年では「自分の生き方」「余暇や趣味」など自分を中心としたものに強い関心をもっているのに対し、成人では「家族」「住んでいる地域」「日本の政治」など自分のとりまく環境にも関心が広がっている。青少年ではとくに、「自分の生き方」に対しては努力次第でよくなる

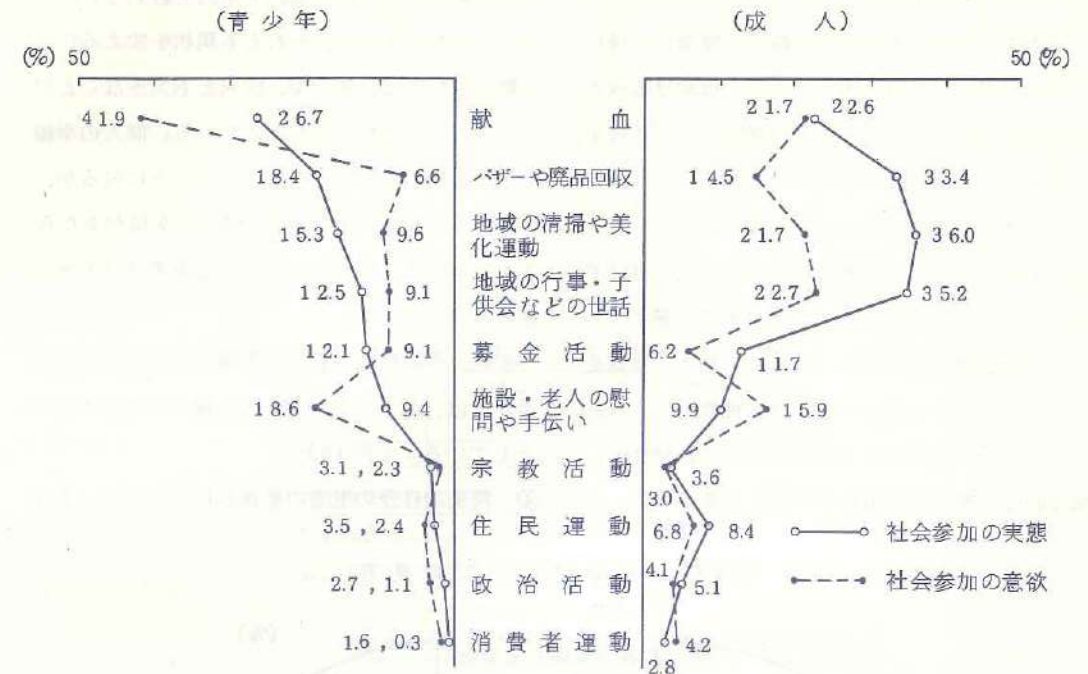
見通しをもち、よくするために努力しようという意欲も高い。ただ、関心をもつことが、その事柄に対し努力しようという意欲につながるとは必ずしもいえず、この意欲は、がんばればよくなるという努力の有効性に強くかかわっているといえよう。(図8)

図8. 社会的関心の広がり



② 社会参加活動についてみると、青少年の場合、「献血」「募金活動」で成人よりも、参加経験、意欲ともに上回っているが、「地域の清掃や美化運動」など地域との密接なつながりのあるものは、かなり低くなっている。(図9)

図9. 社会参加の意欲と実態との比較



5. 価値観・人生観

① 自分にとって最も大切なことは何か、19の項目をあげて尋ねた。青少年にとって大切なものとしては、「友人」(80.0%)、「親」(72.3%)、「自由」(48.3%)などが上位となっ

おり、これに対して成人では、「家庭」(83.9%)、「親」(51.9%)、「友人」(45.5%)が多くなっている。青少年は成人に比べて「友人」「親」をはじめ「自由」「愛」「個性」「恋人」が高く、逆に成人では「家庭」「仕事」が高くな

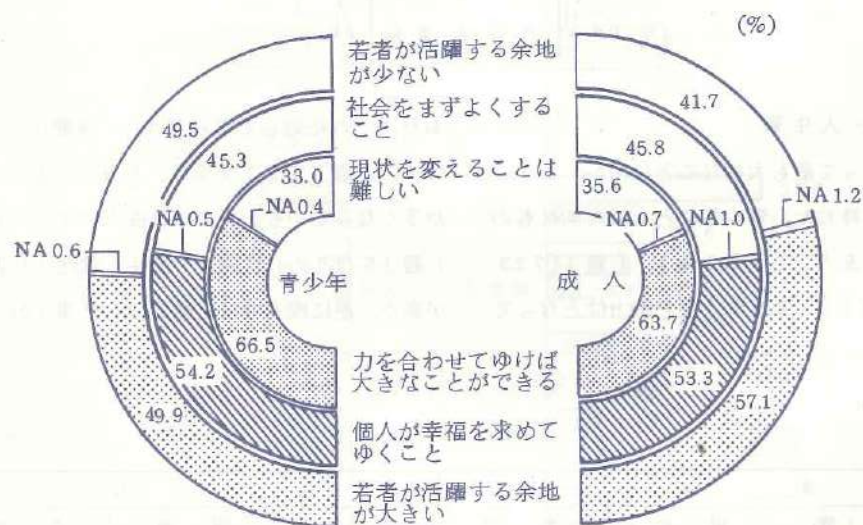
表1. 大切なもの

順位	項目	青少年			成人		
		全体	男性	女性	全体	男性	女性
1位	友人	80.0	77.7	82.1	家庭	83.9	85.9
2位	親	72.3	66.2	77.2	親	51.9	54.2
3位	自由	48.3	49.2	49.8	友人	45.4	44.9
4位	生きがい	45.5	45.0	47.6	仕事	44.9	44.0
5位	平和	44.6	41.2	47.5	平和	43.2	43.9
6位	家庭	44.5	38.4	45.9	生きがい	43.1	40.0
7位	愛	35.5	34.8	41.2	金銭	38.2	32.9
8位	個性	34.4	34.6	34.2	自由	27.6	26.0
9位	金銭	32.3	32.0	32.5	愛	23.9	24.9
10位	仕事	31.6	29.8	28.8	余暇	17.8	15.7

っており、これらの差はかなり大きなものとなっている。(表1)

② 生き方や考え方について様々な側面から尋ねてみた。青少年では「困っている人は助けるべきだ」が95%とほとんどの者が肯定しているほか、「結果の成否は考えずまずやってみることが大切だ」「多少もめることになっても、主張すべきことは主張すべきだ」「努力すればみかえりが必ず得られる」について肯定する者が8割を超えている。また、青少年は成人に比べて「他人とは差をつけるのがよい」「デカイことに挑戦してみたい」「まずやってみることが大切だ」など、個性的、積極的な姿勢を示す項目で肯定する者が多い。

図10. 社会についての見方



年、成人ともかなり楽観的な見通しをもっており、とくに「信頼し、理解してくれる友人に恵まれる」「平穏で幸せな家庭を築ける」では、いずれも8~9割の者が見通しは明るいとしている。

⑤ 青少年と成人が、それぞれ青少年及び大人についてどのようなイメージを抱いているか尋ねてみた。まず青少年に対するイメージについてみると、全般的に否定的なイメージを抱いている者が

③ 社会についての見方を、3組の対になった質問を用意して尋ねた。個人でも力を合わせれば大きなことができるか、それとも現状を変えることは難しいかでは、青少年、成人とも大きなことができるとする者が6割を超えている。個人の幸福を追求することが社会をよくすることになるか、社会をよくすることによって個人の幸福がもたらされるかでは、青少年・成人とも両者ほぼ半々の割合になっている。

また、今の社会は若者の活躍の余地が大きいかな否かでは、成人の方がむしろ活躍の余地が大きいとしている。(図10)

④ 将来の自分の生活の見通しについては、青少

多く、青少年自らも「自分勝手だ」「社会に関心がない」「無責任だ」などマイナスイメージをあげる者が多くなっている。ただ「個性がある」「夢がある」「積極的だ」と肯定的なイメージをもっている者も、2割前後いる。

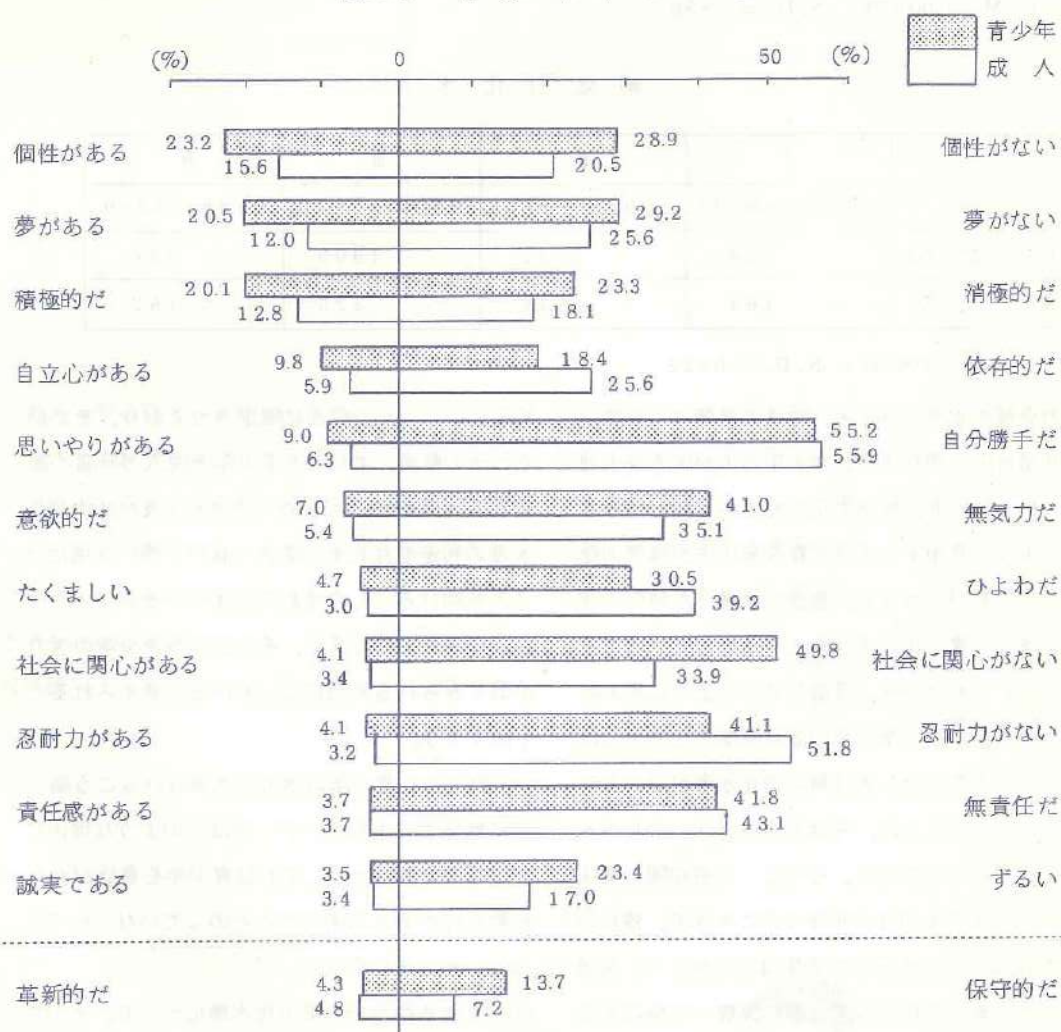
また、成人に対するイメージとしては、青少年は「自分勝手だ」「ずるい」をあげる者が約45%とほぼ半数近くにのぼっている。成人自らのイ

メージとしては、良いイメージも多く、とくに「忍耐力がある」では3割の者があげている。

青少年と成人を比べてみると、青少年のイメージについては、個性と夢があるとする点で大人に勝っているが、忍耐力がなく、無気力、無責任、

依存的でひよね、社会的関心が薄いというイメージが共通している。また大人イメージでは、青少年より保守的で忍耐力があり、社会的関心、責任感で勝っているが、ずるいというイメージが共通している。(図11)

図11. 青少年イメージ



6. 青少年の活力発揮水準とその要因

以上、青少年の活力のさまざまな側面について調査結果を概観してきた。以下では、多変量解析等の統計的手法を用いて、さらに深く分析した結果について述べる。

① 活力発揮の水準を測定するため、「意欲の発揮」の質問10項目と「気分の減退」の14項目に対する回答をもとに、因子分析を行い、それぞれ意欲水準と無気力水準として4つのレベルに分けた。(表2)

このようにして構成した区分を用いて青少年の

表2. 意欲水準

レベル	I	II	III	IV
因子スコア	2.700~0.851	0.850~0.000	0.001~-0.850	-0.851~-3.001
実数(人)	893	2,093	1,938	928
構成比(%)	15.3	35.8	33.1	15.8

注) \bar{M} = 0.000023, S. D. = 0.850

無気力化水準

レベル	I	II	III	IV
因子スコア	-2.400~-0.923	-0.922~-0.001	0.000~0.922	0.923~3.249
実数(人)	958	2,042	1,905	947
構成比(%)	16.4	34.9	32.5	16.2

注) \bar{M} = 0.000043, S. D. = 0.922

活力発揮の水準をみると、意欲の発揮については10項目中7項目まで、青少年の方が成人を上回っている。一方、無気力化の程度を比較してみると、14項目中12項目で青少年の方が無気力化の程度が高い。つまり、意欲の水準でも無気力化の水準でも青少年の方が成人を上回っていることになる。これは一見、矛盾しているように思われる。通常、意欲水準の高い者は無気力化水準は低く、意欲水準の低い者は無気力化水準が高いと考えられる。ところが、先ほどの各々4つのレベルをクロスさせてみると、そのような逆相関の関係にあてはまるものは56%ほどにすぎず、残りの半数についてはそうした関係はみられない。意欲の高さと無気力化の程度は単に裏腹の関係にあるのではなく、本来別の側面であるということである。

青少年の活力水準は成人に比べて決して低いものではなく、むしろ高いほどである。それなのになぜ、青少年の活力が低いとみられているのだろうか。恐らく、それは大人の青少年を見る目が

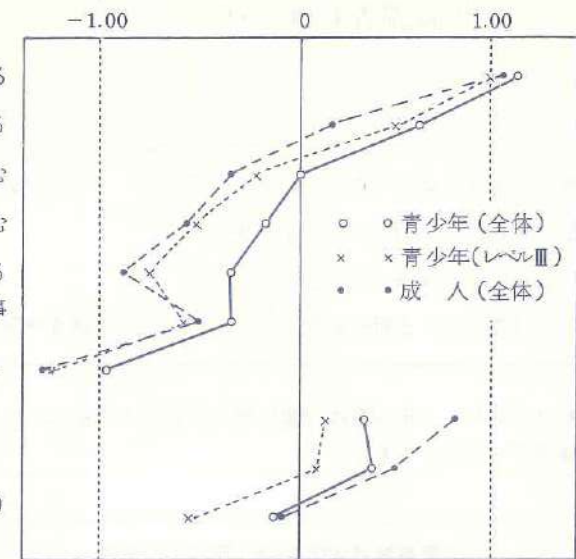
特定のいくつかの側面に限定されており、そのいくつかの側面、すなわち青少年と成人の特質の顕著な「仕事をコツコツやり続ける」「弱い立場にいる人を助ける」「恵まれない条件の改善にとりくむ」で成人よりも低く、そのことが青少年の活力が低くみられる原因になっていると考えられる(図12)。

それでは、青少年は活力の水準はけっこう高いのに無気力にもなりやすいのはどのような理由によるものであろうか。それは青少年を意欲がわく行動に向かわせる条件がととのっていないからではないかと考えられる。

② 意欲水準及び無気力化水準について、その規定要因を検討すると、性、年齢、学歴などの属性ではあまり関連がなかったが、意識・態度要因で関連がみられた。すなわち活力の発揮については、社会についての見方、おもしろいと思っやっていることの有無、家庭での気持などの要因が大きく関係している。また無気力化の要因としては、

図12. 意欲の青少年と成人の比較

正しいと思うことをやりとげる
 収入が見込めることをやる
 芸術や技術の創造にとりくむ
 人が失敗したことにとりくむ
 開発途上国に行き仕事をする
 考え方の違う人と一緒に仕事をする
 危険なことにとりくむ
 仕事をコツコツやり続ける
 弱い立場にいる人を助ける
 恵まれない条件の改善にとりくむ



家庭や学校に対する気持ちの関係が大きい。

③ 以上の分析を通してみると大きく3つの要因に整理することができる。第一は能力発揮や仕事に関連する要因である。青少年にとっては現在の生活状況などよりも、将来の見通しが活力発揮の水準を規定しているということである。第二は学校体験のよしあしである。これが、とくに無気力

化の程度を左右するというのは、自らの学校体験が明るい前途を切り開くのに何の貢献もしていないという実感によるものと考えられる。第三には家庭・家族に関する要因であり、青少年にとって家庭とのつながりが活力発揮に大きく影響しているといえるようである。

